

は蒔べからず、たねを水にひたし、灰をふりもみ合せ、一粒づゝばらくとなりたるを、手籠に入れ、左の手にさげ、或わきにはさみ、先筋をかき置て、かたよりなくばらりとまき、種子おほひ四五分ばかりして、上をかるく踏付べし、たねを土と思ひ合すべきためなり、但まめりたる埴土をば踐べからず、中より下の地ならば、下に灰糞をまき、其外肌をるをも入べし、肥たるに肌をるは入るに及ばず、尤雨氣に蒔べからず、若又うゆべき時分に早せば、水をそゝぎまめして蒔もよし、下〇略

〔農家事後編一〕草棉名目并に土佐棉の事

草棉のことは、前編に如水翁〇見の説あれば、委しく記さず、先攝津、河内、大和邊にて作る所の種類、

かぐら 八寸黄花 備中ころり 麻わた 長九郎 太こくび ちんこ のら 山城麻棉
河内ぼたん 今七兵衛 早わせ てつぼう 黄花 權九郎 猿の耳 赤わた 青わた
其外國々によて數多し、右の内にも早中晩三段ありて、少々の勝劣はあれども、いづれもすぐれたる種子なり、

爰に又文政四五年の頃より、土佐といへる一種を、攝州にて専ら作りはじめてひろまりぬ、元來土佐の國より來れる種子なるゆゑ、土佐と名付しとみへたり、此綿はくり粉多く、通例の綿七十目ある分量には八拾目もあり、早魃にいたまず、風にまけず、雨につよく、綿の色白し、性堅實成ゆゑ、糸にして強し、まかしながらねばり氣少しうすし、花は白くして小さく、桃とがりあつく大きし、木は小ぶりなれども、桃多く生ずるなり、木肌は色の青が、りたるに似たり、

〔寶曆集成絲綸錄 二十八〕寶曆九卯年八月

一綿實の儀も、近來專水油に絞出、菜種同様の事に候上は、向後大坂綿實問屋相定候間、右問屋之